

第2部・「連携」の最新情報から

## 積極アピール実り病院の ケアカンファレンスへ

薬局セントラルファーマシー長瀬

熊本赤十字病院の薬局セントラルファーマシー長瀬を管理業務部長を務める天方幸子さんは、昨年6月から2回のペースで、医師の専ら在宅ケアに関与する人達と話し、連携を促した薬局の院内カンファレンスに積極的に参加するために、「遠隔でも良質な在宅ケアを実現するには薬剤が積極的にかかわるべき」という考えをもった薬局の働きを促してもらえたりした。天方さんは、自然発生的な在宅ケアへの関わりを促す。

### 気がねや遠慮のない空間

熊本赤十字病院の院内カンファレンスでは、まず、その日出席する患者の情報を確認する。主な参加者は、院内から緩和チームの医師、看護士、薬剤師、院外から退院後の治療を担当する診療所の医師や看護士、薬局薬剤師（天方さん）など。全員で病状、病状、オピオイドの量、治療上の問題点などを共有した上で病院側に向かい、終わると再度カンファレンスを聞き、今後の治療方針の確認、参加者間の情報交換を行う。

気がねや遠慮はない。各専門職種がそれぞれの立場から率直に疑問や意見をぶつけ合う。「患者さんのた



薬局セントラルファーマシー長瀬管理業務部長の天方幸子さん

めに、という1点で真顔に連携しあおうという空気が流れています」（天方さん）。

### 患者の実情や問題点が把握できるように

カンファレンスへの参加は、薬局に多くのメリットをもたらした。「緩和ケアでは薬学的な問題がある程度絞られてくるということや、本当は患者が在宅に逝きたいがインフォームドコンセントがうまく進まず返せない事情があることなど、実情や問題点が理解できるというになりました。われわれ薬局はいつも病患処方せんを受けているわけではありませんし、情報が限られていたものでとても助かっています」（天方さん）。

医療チームの一員として、薬局薬剤師がスタートラインに立てたことは大きな前進だが、何れも病院から参加を許可されたわけではない。日ごろから病院の地域連携室や緩和ケア担当看護士、緩和担当医師などとコンタクトを取り、同薬局が在宅訪問、疼痛緩和に力を入れていることを積極的にアピールし続けてきた積み重ねがこの結果を生み出した。

### とにかく薬局にチャンス

連携の始まりは、昨年秋頃に、同院主治の勉強会にたまたま声をかけてもらい、参加したことがあった。勉強会はそれまでも定期的に開催されていたが、出席者は院内関係者のほか、開業医、訪問看護師などで薬局薬剤師はほぼ皆無。「このチャンスを通してはいけない」と考えた天方さんは、病院側に働きかけ、以後の勉強会は、事前に声がかかるようになった。

勉強会に参加するだけでなく、在宅療養の受け皿として薬局が貢献できることや、無償調剤・麻薬の適正管理などの環境整備を同薬局で進めていることも積極的にアピールした。特に、地域連携で重要な役割を担う緩和ケアチームの医師と地域連携室の看護士への働きかけを強めた。「うちの薬局じゃなくてもいい。とにかく薬局にチャンスください」と訴え続けました」（天方さん）。

### キーパーソンをおさえる

熱意は届いた。病院側は薬局をゲストではなく、緩和ケアチームの一員としてとらえるようになり、勉強会初参加から数か月後、「退院時共同指導に入ってみたい」と待望の声がかかった。6月には同院の退院時共同指導に天方さんが初めて参加。定期的に行われるカンファレンスにも薬局代表として出席できることになった。

あいく退院時共同指導への参加は6月の1例だけだが、毎週行われる



薬局薬剤師兼薬剤師の長瀬の天方幸子さん

院内カンファレンスには、都合がつけば月2回程度のペースで出席している。

天方さんは、トントン拍子で連携にこぎつけた要因について、「緩和ケアの医師と地域連携室の看護士、この2人のキーパーソンという関係を構築できたことがよかった」と話す。

### 独立性を担保した上での連携

一方、真面目な在宅緩和ケアの実践には、退院後の連携が不可欠だ。同薬局は現在、2-3人の在宅患者を受け持っているほか、有科老人ホームなど施設への訪問も行っているが、いずれも密着に連携を図るよう心がけている。

連携相手の1人である月田在宅療養支援診療所の近藤幸子院長は、「薬に関しては適切に提議照会をかけてもらえますし、こちらから「どの薬を使うべきか」「どれくらい使おうべきか」と相談することもあります」と力を認める。理想の連携像は、病院における医師と薬剤師のような、自由に相談しあえる関係だ。しかし、保険薬局は医療機関の薬学部と違って、法的にも機能的にも独立した存在。近藤さんは、この「独

立性」と適切な距離感を保った上で、連携を深めていくことが重要だと指摘する。

### 連携は点ではなく面で

立ち位置を見誤ることなく、連携を強化し、さらに地域医療の質を高めるにはどうすればいいか。同薬局経営者の稲葉一郎さんは、「点ではなく、面での広がりが必要」と話す。「在宅ホスピスは地域全体が受け皿にならないといけません。そのため、うちの薬局だけが頑張ってもダメなんです。1薬局じゃなく、きちんと対応できる基幹的な薬局をもっと増やす。そういう体制が整わないと、「薬は薬局に任せよう」という流れにはなっていきません」（稲葉さん）。

薬局がチームの中に入り込むには、当たり前だが薬局側からアピールしなければならぬ。

同薬局では、熊本赤十字病院との関係を活かした実績に甘んじず、今後はほかの医療機関への働きかけも進めたいと考えている。医療機関だけでなく、介護の領域に役であるケアマネジャーとのコミュニケーションも増やし、パイプの強化を進めていく方針だ。



薬局セントラルファーマシー長瀬経営者の稲葉一郎さん

人には  
ヒトの  
乳酸菌



乳酸菌は、種類によってその効果も働きもさまざまです。新バイオフェルミンS錠にはそれぞれ役割の違う3種の乳酸菌を配合。広い腸のすみずみに届いて増え、乱れがちな腸内のバランスを正しい状態へ整えます。届く、増える、効く。



### 新バイオフェルミンS錠

腸内（便通を整える）、肝臓、腎臓、脳神経系に3種の乳酸菌を配合。腸内環境を整え、免疫力を高める。腸内環境を整えることで、健康をサポートします。

製造元：バイオフェルミンS錠株式会社  
〒830-0801 福岡県糟屋郡宇佐市下7丁目8-4  
http://www.biofermin.co.jp/

販売元：長瀬薬局工業株式会社  
〒830-0801 福岡県糟屋郡宇佐市下7丁目8-4

©長瀬薬局工業株式会社  
〒830-0801 福岡県糟屋郡宇佐市下7丁目8-4  
093-281-1111（受付時間） 電話：077-777-4490  
福岡県糟屋郡宇佐市下7丁目8-4